

令和7年度 日本大学三島高等学校・中学校 自己評価票

【本校の目指す学校像】

本校の教育方針・目標に基づき、地域社会に根ざす伝統校として、知・徳・体のバランスを重視した人間性を育むとともに、21世紀型教育（グローバル・ICT・キャリア教育・アクティブ・ラーニング等）を推進し、日本大学のスケールメリットを生かした教育に積極的に取り組む。そして21世紀のグローバル社会に通用する力を身につけ、自らの力で道をひらき、希望をかなえる生徒を育成する。

1 校訓

自由と規律

2 教育方針

本校は「日本大学の目的および使命」に基づき、豊かな自然環境と恵まれた教育環境の中で、教育理念である「自主創造」の精神を育み、世界の進展に適応し、「自由と規律」を重んじ、世界の平和と人類の福祉に貢献する人間を育成することを教育の方針とする。

3 教育目標

- ① 自主協同の精神を養い、心身ともに健康な人間を育成する。
- ② 広く世界の文化を学び、文化的創造力溢れる人間を育成する。
- ③ 豊かな教養を身に付け、真理と平和を愛する人間を育成する。

4 スクール・ミッション

社会のさまざまな分野でリーダーシップを発揮できる人材を育成する

- ① 向上心を育み、自ら学ぶ習慣を身につけ、時代を担う人材として必要となる学力をつけます。
- ② 広く正解や文化を学び、豊かな心身を育み、豊富な知識や多様な価値観を身につけ、自ら考え行動する力をつけます。
- ③ 自分の将来の生き方や社会への関心を深め、人生を描き、をひらく力を身につけます。

【本校の特徴】

本校は、日本大学付属校として1958年に創設し、三島の地に定着して60余年が経った。2003年には中学校を創設し、現在、日本大学国際関係学部の併設校として、日本大学の研究及び教育の実績を本校の教育活動の基盤としカリキュラムの充実を図っている。また、日本大学への進学を中心に常に大学進学率90%以上を誇る安定した大学進学実績は地域の人たちから高い評価や支持を得ている。大学キャンパスの中に位置し広く落ち着いた教育環境に加え、施設の全てにおいて耐震化が完了していることで、安心安全で充実した教育活動を展開することができている。

【令和7年度の重点目標】

令和6年度は、募集活動で一定の成果が見られた一年である。入学者数が過去最少を記録し、学校運営面でもかなり苦戦を強いられる状況の中ではあったが、入試広報に工夫が見られたた

め、令和7年度入学者の定員確保につながる予定である。この好転しつつある状況に、更に拍車がかかるよう教育の活性化を止めないエネルギーが必要となる。実際は少子化の影響が大きい中ではあるが、学校現場にできる生徒の魅力を最大限に引き出すことによって、学校の付加価値を上げて、元気な学校づくりを目標としていきたい。

また、令和8年度に教育課程の見直しを図るため、カリキュラムの全般的な見直しを図ることによって、より活発な教育活動を導き出せる環境づくりに取り組むことを掲げていきたい。そのために、教員研修の充実を図り、生徒の主体的な活動を促す教育機会の構築を目指していく。さらには、キャリア形成のきっかけを設けられるような進路指導により、日本大学進学者数を増やすことに努めていく。

〔令和7年度の自己点検・評価結果〕

評価項目	取組目標 (Plan)	取組状況 (Do)	達成状況 (Check)	令和8年度の実行方策 (Action)
教育活動	特色・魅力のある教育への取組	生徒の自学習への取組を強化すべく、スタディデザインセンターを開設し、放課後学習への取組を始動した。	B	まずは、トライアルとして、希望者による放課後学習への参加を募った。令和8年度の全校生徒を対象にした取組を検討していく。
	生徒による授業評価アンケート結果に基づく授業改善	「教員の熱意(④)」や「板書・投影資料の工夫(⑤)」において、全体平均を上回っており、授業力という点においては、及第点であった。 一方で、「家庭学習の指示(⑩)」については、3.14となっており、全高校平均(3.18)を下回っていた。	B	授業への熱量は、引き続き、学校全体でよい雰囲気づくりを心掛けていく。家庭学習への取組は、令和8年度から本格始動するスタディデザインセンターの活用を含めて、更に工夫をしていく。特に、成績下位者指導への取組を課題として、学力向上に努めていく。
	高大連携教育の取組	令和6年に引き続き、希望者に対して国際関係学部的一般教養課程の授業履修の機会を設けた。	A	オムニバス形式の授業スタイルに、生徒の興味関心が高まり、年々参加者数が増えてきている。令和8年度以降も、積極的に参加者を募っていき、学部進学者数の増加につなげる。
		アカデミックコースと中学校を対象に、先端研究講座を実施した。大学での専門研究を知ってもらう機会として、年3回(5, 9, 2月)実施した。	A	将来のキャリア形成の一助となる企画によって、学習意欲の向上につながる行事を企画していく。
		中学校は、恒例となった箱根遠足や臨海学校のような中学校行事で、大学生インターンシップ生にサポートを依頼した。	A	国際関係学部のインターンシップ生のサポートにより、中学校の各種行事を安全に実施していく。
	学校生活への配慮	いじめ防止のための取組・いじめ事案への適切な対応	各学期に学校生活に関するアンケートを実施している。 特別支援コーディネーターを設置し、定期的な委員会を実施した。 特に重大案件となるような事案は発生しなかった。いじめに限らず、特別指導を要する生徒に対する情報共有ができた。	A
危機管理マニュアルに基づく安全管理及び危機管理のための取組		各種事案発生時における対応に関して、教職員会議で確認をした。	B	インシデント発生時に対する速やかな対応を徹底する。 定期的な注意喚起と未然防止対策を常に検討する。

評価項目	取組目標 (Plan)	取組状況 (Do)	達成状況 (Check)	令和8年度の取組方策 (Action)
	生徒会の自治活動との連携	公共委員会を主体として、遅刻者根絶運動を毎月実施した。	A	生徒の主体性の育成につなげていく。 基本的な生活習慣の確立による学力向上につなげていく。
課外活動	地域連携の推進	地域イベントへ生徒会役員を積極的に派遣した。例えば、高校生主体のシンポジウム（「三島の未来を描く会」・「高校生公開討論会」）や三島市の一日人権擁護委員としてのチャリティーなどである。	A	生徒の主体的な自治活動を通して、より一層の地域連携の中に溶け込む生徒会活動を目指していく。
	部活動の外部連携	少子化の影響から、部員不足問題や専門性の高い部顧問の確保が難しくなっている。	C	部活動の精査を含めて、生徒会活動の見直しが必要な時期がきている。教員の働き方改革につながるような外部連携や協定を積極的に検討していく。
	生徒会活動の外部発信	生徒会運営のホームページやSNSの活用による生徒会活動の発信を行った。	A	今後、生徒たちの情報リテラシーの涵養につながるような取組として、積極的なSNSの活用によって発信力を高めることを検討していく。
進路指導	日本大学進学に向けての取組	教員向けの会議を定期的実施した。	A	3年次を初めて担任する教員にも、しっかりと入試システムを理解してもらい、担任格差にならない進路指導体制を構築することを目指す。
	日本大学進学相談会等の実施	日本大学だけの進学関連行事を延べ8回実施した。対象も幅広く、保護者にも理解を求めた。	A	生徒だけではなく、保護者も含めて進学に対する意識を高めることによって、安定した進学実績を上げるだけではなく、進学後のミスマッチにならないような進路指導を心掛けていく。
	外部模試の活用	アカデミックコースを中心に外部模試を実施した。生徒への経済的負担及び監督者への業務負担となっている。	C	外部模試の会場が縮小化され、費用も高騰している。より効果の高い時期、内容を吟味し、精査していく。
保健衛生	感染者数の増加防止に向けた取組	生徒における感染者数は、令和6年度とほぼ変わりはないが、学級閉鎖の数は令和6年度の2.5倍となった。	B	各教室の24時間換気実施を引き続き許可していただき、感染予防・感染減少に努める。
	教育相談部会の充実	令和6年度より特別支援コーディネーターによる教育相談部会を充実させた。全体会を教育相談部会として、各学期に各学年の教育相談部会を開催した。	A	令和8年度は、特別支援を要する生徒に対する個別支援計画を徹底することで、より細やかな指導体制を構築することを目指す。
	生徒相談の充実	令和6年度に引き続き、週3回のカウンセラーによる生徒相談を実施している。予約制ではあるが、時間帯によっては、対応が難しい場面もあった。	B	生徒相談が多様化しているため、教育相談部会と連動していきながら、教員との情報共有する機会を充実させることで、よりより生活・学習環境を築いていく。
図書	読書推進の啓発的な取組	展示テーマを「クリスマス」として11月に実施した。スイーツやチキンなどのレシピ本やギフトラッピングを紹介する本のポップ作成と展示をしたほか、折り紙や画用紙で飾り付けを行った。	A	図書室の図書委員会コーナーのディスプレイ変更の回数を増やし、図書委員の活動を充実させる。

評価項目	取組目標 (Plan)	取組状況 (Do)	達成状況 (Check)	令和8年度の取組方策 (Action)
	「図書だより」の発行	年2回発行した。図書委員が内容・構成を考えて記事を書いて発行した。生徒目線での内容となっており、読書への啓発活動の一つとなっている。	B	より図書室の活用が広がることを目指し、生徒の主体的な委員会活動を中心とした「図書だより」の発行をする。
	芸術鑑賞会の実施	中学生と高校1年生を対象として、三島市民文化会館大ホールにおいて日本大学芸術学部の中村均一先生率いる総勢6名の演奏家の方たちによる演奏会を実施した。	A	令和8年度も、生徒の情操教育につながるような催しを検討していく。
広報	学校説明会の充実	修学支援金の拡充を周知すべく、概要説明に加えて、個別相談会の回数を増やした。	A	修学支援金の拡充の追い風を受けて、好調だった広報活動をいかに継続させていくかを検討していく。学校の魅力自体の発信に努める。
	付属校のアドバンテージの活用	学校説明会で大貫学長による日本大学の魅力を存分に知っていただく機会を設けた。	A	令和8年度は、是非とも理事長にも参加を依頼して、学長とのセッションをお見せする機会を打診する。
	SNSの積極的な活用	ホームページに加えて、各種SNSでの広報活動を展開した (Instagram, Facebook, Threads, X)。	B	各媒体共に一定のページビューがあるので、令和8年度に向けては、更なる活用を模索する。
管理運営	入学者数の確保	令和8年度入試において、高等学校の募集は、単願者+一貫生で入学定員を満たす結果となった (併願歩留り未定)。	A	令和7年度は修学支援金の影響も大きく、令和8年度は実際の魅力を伝えていくことに注力すべき年度にしていく。
	フレームワークの変更	学期制や時差登校に関して、検討を重ねてきた。令和8年度から、検証できる体制となった。	B	学期制の見直しを検討していく。 登校時間を遅くして、下校時間をそろえる時差登校を実践していく。ある程度の課題は見通せているものの、実践していく中で検証・改善を試みていく。
	施設管理・情報セキュリティの高評価	教員自己評価内では、情報セキュリティに関する評価は高かったものの、個人情報に関するインシデントが発生した点は、反省すべき点であった。	C	再発防止のみならず、報告・連絡体制の徹底を強化する必要がある。定期的なチェック機能を充実させることを実践していく。

〔令和7年度の自己点検・評価結果概要〕

令和7年度は、本校にとって大きな変革への第一歩を踏み出した年となった。高等学校においては、修学支援金の拡充により、私立学校への評価が高まり、教育内容に対する理解が深まったものと考えている。地方に位置する学校として、経済的に都心部と同等の高い学費を設定することは困難であり、コストパフォーマンスを重視した教育活動の実施が求められている。教職員の日々の工夫と努力により、学力の向上のみならず、探究活動や課題活動においても一定の成果を上げることができているものと評価している。

中学校においても、私立中学校への理解が地域性により一向に高まらない状況の中、本校としての特色を積極的に発信し、地域における評価向上に取り組むとともに、高い学力の維持に努めている。また、本物に触れる情操教育を充実させ、高い教養を身につける教育を展開できているものと自負している。

一方、少子化の流れは確実に本校にも影響を与えている。令和8年度の生徒募集活動は好調であったものの、この水準を維持することは困難であると予測している。静岡県東部地区、特に伊豆半島を抱える三島周辺は、南部地域からの学校統廃合の波が確実に押し寄せてきている。この少子化の時代において、本校が持続可能な発展を遂げるためには、付属校という特色の

みならず、それに加えて付加価値を見出すことが不可欠であると強く認識した1年となった。

〔令和8年度の重点目標〕

令和8年度の重点目標は、令和7年度に検討を重ねてきた教育内容の充実を図る取組の実践に移行することである。枠組みとしては、基礎学力到達度テストを中心とした行事体系を再編成し、学期制の在り方を見直す。また、定期試験の配置と回数を変更し、単元別試験の導入など、よりきめ細やかな指導を実践できる体制を構築する。時差登校は、近隣では実践例もなく、本校の独自の特徴として、積極的にアピールするとともに、効果を高める時間の活用方法を更なる検討の上、決定していく。

学習面に関しては、アフタースクール構想と称して検討を重ねてきた。スタディデザインセンターを開設し、放課後学習を充実させる取組を強化していく。正規の時間外の学習を、より効果的に推進することで、更なる学力向上を図っていく。

教育DXに関しては、歩みを止めることはできない。教員の働き方に関して、無駄を省き、効率的に業務が遂行できる環境づくりを重点的に行い、教員のワークライフバランスを考慮できる環境づくりに注力していく。

以 上